

課題番号 : DB2831

# 平安時代の「かけ」の意味と用法

## —三代集を中心に—

The meaning and usage of “kage” in the Heian period  
—Mainly from Sandaishu—

福田 美蘭

Miran Fukuda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：和歌、歌語、八代集

Key words : Waka, Kago, Hachidaishu

### 1. 研究目的

「かけ」という語は、語源的にはきらきらとした輝きや、明滅する光、あるいは揺らめく光を意味する言葉であり、古代の人々はそのような光に靈性の発動を感じたとされている。そして「かけ」という言葉は、光そのものを意味するとともに、その光に照らされるものの像や、その背後にできる闇の部分を意味する言葉となった。さらに、影法師・庇護などという意味も生じている。何故このように「かけ」という言葉は意味分化していくのか、その道筋を明らかにする必要がある。

本研究は平安時代の和歌において、歌語として使用される「かけ」を探り上げていくことにした。具体的には、まず勅撰和歌集の和歌を中心に「かけ」の用例を収集し、改めて分化した意味・用法を整理した。研究の過程で用例数を増やすために当初予定していた収集範囲を三代集から八代集まで広げ、それぞれの意味・用法の特質や背景を明らかにし、さらに八代集における用例の推移を考えることを目指した。

### 2. 研究実施内容

八代集の和歌における「かけ」の用例を以下のように分類し、意味項目を設定した。

I 光の意味...①月影・②他の光

II 影の意味...③水影・④鏡影・⑤面影・⑥姿

⑦影法師

III 陰の意味...⑧木陰・⑨山陰・⑩花陰・⑪物陰

IV 恩恵...⑫恩恵

この項目に従って八代集の「かけ」を分類し、

用例数をまとめたものが次の表1である。

表1		古 今	後 撰	拾 遺	後 拾 遺	金 葉	詞 花	千 載	新 古 今	総 数
I 光	① 月影	5	8	7	17	19	3	17	44	120
	② 他の光	2	0	3	2	3	0	4	10	24
II 影	③ 水影	8	12	15	10	11	3	21	31	111
	④ 鏡影	4	3	4	1	3	0	2	3	20
III 陰	⑤ 面影	4	3	3	2	5	0	2	20	39
	⑥ 姿	0	10	6	3	5	2	2	4	32
IV 恩恵	⑦ 影法師	3	2	0	0	1	1	2	0	9
	⑧ 木陰	2	2	8	2	2	4	4	13	37
V 恩恵	⑨ 山陰	2	0	2	0	0	2	1	8	15
	⑩ 花陰	2	6	2	1	0	0	2	5	18
VI 恩恵	⑪ 物陰	0	2	2	0	1	1	0	3	9
	⑫ 恩恵	4	4	4	2	1	1	3	3	22
総数		36	52	56	40	51	17	60	144	456

表1. 八代集の「かけ」の用例数

なお、表 1 は歌の総数ではなく用例の延べ数に基づいている。

次に設定した意味項目に基づき八代集の「かげ」の意味・用法の特質を確認する。

## 2.1 I 光

①「月影」の用例の中で、月の光を指す用例と月そのものを指す用例が併存している。月の光を指す場合は光を白色のものとして捉え、白雪や卯の花に例えるという特徴が見られる。また、月そのものを指す場合は「入る」「出る」「隠れる」などの月の動きから月を擬人的に捉えるという特徴がある。

「月影」以外の光を意味する②他の光の「かげ」25 例の中で日の光が 19 例、夕日の光が 4 例、篝火の光が 2 例認められた。特に「日影」は「日蔭葛」や「威光」などの掛詞としての用例が多いことが特徴的である。

## 2.2 II 影

③「水影」は「浅し」や「濁り」など水の状態によって「かげ」の映り方が左右される特徴がある。また「水影」として映るものや「水影」を映す池や川などの種別も多様である。花や月などの自然の景物だけでなく人の姿や面影も「水影」となり、また池や川の他に袖の涙に映る「水影」もある。

④「鏡影」の特徴は多様なものが映る「水影」と違い人の映像が多いことが挙げられる。また、「澄んだ鏡には“かげ”が映るはずだが、映らない」と嘆くという形が見られる。

⑤「面影」は心に思い浮かべるものため、これまで述べてきた「かげ」のように「見えない」ことがないという特徴がある。また、「面影にのみ」「面影にばかり」という詠み方が多く、そのものの映像を心に浮かべる、という詠み方がされている。

⑥姿となる「かげ」は人を意味する用例が主なものとなる。また景物と人の姿を重ねる場合も多く見られる。

⑦「影法師」は人に寄り添うものとして多く詠まれるという特徴がある。また、表 1 にあるように「影法師」は八代集を通して 9 例しかなく、歌語としてはあまり発展しなかったと考えができる。

## 2.3 III 陰

⑧「木陰」は夏の季節で詠まれると涼をとるためにとされることが多い。また、常緑樹の場合は不変性とつながり、長寿を願う「松陰」として詠まれるのも特徴のひとつである。

⑨「山陰」は「三上山」「三笠山」など山の名前が掛かるという特徴が挙げられる。また、「山陰」そのものよりも「山陰という場にあるもの」が歌の中心になる用例が多く見られる。

⑩「花陰」は桜の木の「下陰」の用例が多く見られその美しさを詠み込むという特徴がある。他には藤の花や卯の花などの「花陰」も詠まれる。藤の「花陰」の場合は藤原氏の庇護を示すなど、花の美しさ以外の意味が歌に詠みこまれている。

⑪「物陰」は日の当たらない不遇の場所としても詠まれるとともに、身を隠す頼れる場所としても詠まれるという特徴がある。

## 2.4 IV 恩恵

⑫「恩恵」の「かげ」は他の「かげ」の掛詞として詠まれるという特徴がある。特に「木陰」など III 陰の意味の分類の掛詞になっている用例が多く見られた。

## 3. まとめと今後の課題

八代集を通して「かげ」の用例数を確認すると、いくつかの特徴が見られる。

まず表 1 からわかるように「かげ」は歌語として八代集を通してまんべんなく詠まれている。また、456 例中 211 例が II 影の項目の用例である。さらにそのうち 111 例が「水影」となっており、「水影」は八代集を通して用例数が多いこともわかる。これは「水影」が人や景物が様々なものに映るという多種多様な詠み方ができたためだと考えられる。

対して、総数としては一番用例数が多い「月影」や、「水影」に次いで三番目に多い「面影」は他の分類に比べ「新古今集」に用例数が偏っていることもわかる。これらは新古今集で特に歌材として好まれていたと考えられる。

今回八代集全体の「かげ」の用例を分類し整理したがそれぞれの歌集における用例の傾向までは掴むことができなかった。今後、焦点を各歌集にあてより詳しく傾向を把握することが課題である。